

2024年12月1日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教17「命の源泉」

詩編107：1～9、ヨハネ4：9～15

サマリアの女性は、はじめから喧嘩腰です。ユダヤ人とサマリア人は旧約の時代から対立関係にありました。もともと同じ民族ですが、国が南北に分かれまして、それぞれ礼拝の場所を持つようになった。それも対立の一つの火種になりました。自分たちこそ正統であると主張しました。特にユダヤ人はサマリア人を嫌いました。最初に北イスラエルがアッシリアによって滅びますが、それによってサマリアはアッシリアからの入植者たちも多く雑婚が進みました。また異教的な儀式が流入されました。律法に厳格なユダヤ人はそれを軽蔑していたのです。9節の「交際しない」という言葉は、同じ器を用いるということから来ているようです。親しい間では、それこそ同じ器で回し飲みのようなことをするでしょう。お茶の席でも同じ茶碗から飲むことをいたします。けれどもユダヤ人とサマリア人はそれができなかった。ユダヤ人はサマリア人と交際することを厳しく禁じておりました。この女性は普段からそういう差別的な扱いを受けてきたのかもしれませんが。そうするとイエスさまから「水を飲ませてください」と言われるのは、一体どの口が言っているのかということになります。いつも自分たちを嫌って、同じ器で飲もうとしないあなたがたユダヤ人が、わたしに水を飲ませてくださいと言うのですか、というニュアンスです。この女性の態度はしばらくこの後も続きます。

宗教改革者のカルヴァンは、注解書で次のように書いています。「この女は、はじめからキリストをばかにしている。さらに、かれをあざけり、冷笑しているのである・・・それというのも、語っている人が、わたしたちにとってなんの権威もないあいだは、かれの教えはまったく耳にはいらないものだからである」この時点では、まだこの女性にとってイエスさまは、ただ疲れて助けを求めているユダヤ人の旅人でしかありません。だからなんの権威もない。カルヴァンの注解書を読んでサマリアの女性のイメージが変わりました。これまでわたしはサマリアの女性に対して、良い評価をしていたように思います。「主よ」と繰り返し呼びかけていますから、だんだん彼女は心を開いていると思っていました。

けれども人間は、そんなに簡単に変わるものではありません。口先では「主よ」と言うでしょう。でも心の中ではいつまでも疑わしいと思っているのです。しかも自分たちを蔑んでいるユダヤ人です。この時とばかり女性は日頃の恨みをぶつけます。案外、この人はかなり強い女性なのかもしれません。かつて五人の夫がいて、今も夫でない男性と暮らしているのも、捨てられたのではなくて、彼女の方が次から次へその遍歴を重ねてきた。そういうある意味したたかな女性なのかもしれない。それでも満たされない、癒されない渇きがあったのです。

イエスさまは、そのようなわたしたちの内面を見抜かれ、そこに入って行かれます。そしてその魂の渇きに気づかせるのです。16節でイエスさまは「あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われます。それこそがこの女性の抱えている問題の核心をつくものでありました。罪による魂の渇き、ヤコブの井戸からどんなに水を汲んで飲み続けても決して癒されることのない渇き。どんなに夫を取り替えて遍歴を重ねても満たされない渇き。それはあなたの中に泉がないからだ。あなたが神さまとつながっていないからだ。だからまたすぐ渇くのだ。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。あなたにその命の泉を与えよう。そうイエスさまはおっしゃっておられます。

この女性は、自分以外のところに問題があると思っていたのかもしれませんが。例えば、サマリア人としての境遇、そういう社会の問題。村から爪弾きにされること。あるいはこれまでの夫たちのような人間関係。ヤコブの井戸のように、そこから渴きを癒そうと汲み続けるけれども、またすぐ渴く。満たされない。それを社会のせいにする。周りの人のせいにする。自分がこうなったのはこの社会のせいだ、夫のせいだ。それがこの女性の苛立ち、不満に表れています。でも誰かに不満をぶつけたところで、問題は全く解決していません。ヤコブの井戸ばかり見て、自分自身の中に泉がないことに気づいていない。神さまとつながっていないことに気づいていない。イエスさまはこのような対話を通して、そのことに気づかせようとしています。

高いところに立って、上から目線では対話になりません。自分の正しさを一方的に主張するだけでは話は通じない。イエスさまは、まことの人となられ、その渴きを知っておられる者としてこの女性と向かい合っておられます。「水を飲ませてください」と、自ら渴きを覚えてくださった。この罪の世に入られて、わたしたちの魂の渴きを負ってくださった。それが「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」(1:14) クリスマスの出来事です。そのようにしてわたしたちの疑いや無理解を払いのけ、イエスさまご自身がこの壁を乗り越えてくださいました。

そしてこのイエスさまの渴きは、やがて十字架へと向かいます。イエスさまは十字架の上で「渴く」(19:28)と言われました。わたしたちの罪を赦し、このどうすることもできない魂の渴きを癒すために、ご自身がその命を注ぎ尽くして、十字架で死んでくださいました。そして三日目によみがえられ、神さまとのつながりを与えてくださった。決して渴くことのない命の源泉をわたしたちの中に湧き出させてくださったのであります。それゆえにもはや誰かのせいにするのではない。自分の中に命の源泉を持つ者は、愛を惜しみなく与え、融和、和解に生きる者とされるのです。

今日はこの後聖餐に与ります。先ほど、ユダヤ人とサマリア人は器を共にしないと申しましたが、もともと聖餐は同じ杯からぶどう酒を飲むという仕方で行われました。イエスさまも最後の晩餐の時、器を一緒にしたのです。罪人であるわたしたちと器を共にしてくださった。わたしたちもその思いで聖餐に与ります。器を共にする。そこに平和があります。神さまとの和解、そしてわたしたちの和解の道です。命の源泉を持つ者は、そのように和解に生きることができます。

天の父よ。御子はその命をささげて、わたしたちの中にあなたとの和解、命の泉を湧き出させてくださいました。その恵みを覚えさせてください。アドヴェントが始まりました。あなたが独り子をお遣わしになられる仕方でわたしたちとの対話を始めてくださいました。どうぞわたしたちもそのように他者へと心を通わせることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。